恵信尼文書の用語

金子　彰

一　恵信尼文書について

恵信尼文書[1]を残した恵信尼はその出自に不明な点が多く、京都出身説、越後の豪族の関係者説とが種々唱えられている。本稿では、書状が示す言語実態から、鎌倉時代初中期の様相を示し、更に当時の口語を使用し、東国語といわれるものを多く持つ点を記述する。

恵信尼は書状の内容から寿永元年（一一八二）生まれ、文永五年（一二六八）に没したことが判明する。親鸞（一一七三～一二六二）が越後流罪中に其の地越後において同棲していたこと、その後共に関東に赴いたこと、晩年は夫の親鸞と別れて越後へ移ったことなどが彼女の書状の内容などから判明している。現存する書状は晩年の建長八年（一二五六）、七四歳から文永四年（一二六七）、八六歳頃のもので、書写時期は鎌倉時代の中期にあたる。遠く越後の地から、京都の地で夫親鸞の世話をしている末娘の覚信尼に宛てたものである。恵信尼の書状は二通が下人の譲り状であるが、他の書状が与えた意義は大きく、夫親鸞の経歴が判明したことはそのひとつである。親鸞が若き日、比叡山の「堂僧」だったことや、六角堂に参籠して聖徳太子の夢告を受けたこと、法然の門に帰して念仏門徒となった経緯、関東の地で「三部経」千部の読誦を行おうとしたことなどが、書状によって知られたのである。

日本語史的にも、数少ない女性の中世文書の中にあって、一個人の多量で直筆文書の伝存することはこの書状の意義を高めている。しかも中央地域ではなく越後に在住し、その地から発信された書状は稀な存在である。本書状が京都に住む自分の娘に出されたものであり、書状は都への便に間に合うように、左掲のように急ぎ認められたこと等の文章がある。何度も推敲を重ねたような跡はみられない。そこには形式張ったものは見られず、恵信尼の当時の口語「たし」が含まれているのである。

なにことも（何事）申たき事、おほく（多）候へとも、あか月（暁）たより（便）の候よし申候へは、よるかき（夜書）候へは、よにくらく（暗）候て、よもごらん（御覧）しへ候はしとて、と、め（止）候ぬ。（第十通82行）

二　言語の時代性

以下、恵信尼書状の時代的特徴を記述する。

1、侍りと候ふ

「はべり」と「さぶらふ」は、意味・用法が殆ど同化し、次第に「さぶらふ」へ移行を起こすものである。書状には明確に「侍り→候」という変化を示し、平安時代から鎌倉時代へ移った言語の時代的特徴を如実に示している。

恵信尼書状は全例「候」のみである。

侍り　0

候ふ　44、候は18、候23、候へ3

候ふ（補助動詞）

1、動詞・補助動詞＋候　153　候は　14、候　103、さふらふ　2、候へ　34、
2、形容詞＋候　22
3、助動詞＋候　32
4、「に」又は「に＋係助詞」＋候　19
5、「にて」又は「にて＋係助詞」＋候　27
6、「て」又は「て＋係助詞」＋候　72
7、接続不明＋候　おたしく□□候しかゝと（第九通14行）

2、漢文訓読語の受容

いわゆる漢文訓読語と和文語の二形対立[2]に照らして、恵信尼の漢文訓読語の受容の実態を示す。

恵信尼書状の漢文訓読語ーゴトシ、ザル、ズシテ、イマダ（～ズ）、アルイハ、タマタマ、フサグ

書状は末娘に差し出されたもので、他人宛の書状よりは形式張ることは考えらない。そこには日常の言語生活がより反映していよう。当時の女性の漢文訓読語の使用は、宗教者の妻という環境か、あるいは、平安時代の女性とは時間の経過があるものか、漢文訓読語が日常言語生活へは浸透している。しかし「イマダ～ズ」の場合、恵信尼の結びは～ズが「イマタ～候」「イマタ～ぬ」「イマタ～候やらん」等のみで～ズが使われておらず、和漢混淆型とでもいうべき形になっている。（以下抄出）

ゴトシーたゝおともせすしてふしておはしませは御身をさくれはあたゝかなる事火のことし（第五通10行）

ザルーたよりにて候しかはたしかにや候はさるらんとてこれたしかのたよりにて候へは（第二通6行）

ズシテーかんひやう人をもよせすた、おともせすしてふしておはしませは（第五通8行）
イマダ（〜ズ）ーよにうれしくおほえ候きぬのおもてもいまたもちて候也（第十通23行）
アルイハーみ一人にて候はねはこれらかあるいはおやも候はぬおくろの女はうのおんなこおのこ、（第三通83行）
タマタマーたま〳〵めをふさけはきやうのもんしの一時（字）ものこらす（第五通18行）
フサグー大きやうをよむ事ひまもなしたま〳〵めをふさけはきやうのもんしの一時（字）ものこらす（第五通18行）

3、漢語とその表記

恵信尼の漢語の使用率は以下の通りである。

異なり語数　六一八語（漢語　一七九語、使用率　二八・九％）
延べ語数　一六八二語（漢語　二七四語、使用率　一六・三％）

これを時代的に相前後する和文資料と比較すると、擬古文的性格を持つ徒然草あたりと類似した傾向を示す。鎌倉時代の女性の漢語受容の実態の一例である。

（異なり語数）枕草子12、2％　源氏物語8、8％　大鏡27、6％　徒然草28、1％　平家物語49、4％
（延べ語数）　枕草子6、6％　源氏物語3、4％　大鏡15、6％　徒然草12、1％　平家物語23、1％

恵信尼の漢語の種類（抄出）

一般語類（名詞に限らない）

和語との複合語ーいまいちと（一度）・おゝうむひやう（温病）・かこのまえ（加古）・けさおんな（袈裟）・りやうとも（領）・下人とも・入道め

一字漢語ーしん（心）・たう（塔）・ひん（便）・もん（文）

二字漢語ーうむひやう（温病）・けかち（飢渇）・けす（下衆）・こせ（後世）・こらん（御覧）・さいこ（最後）・さうてん（相伝）・しせん（自然）・しちむ（実夢）・さうたい（正体）・せうもん（証文）・しょ〳〵（所所）・しりょ（思慮）・せうまう（焼亡）・せけん（世間）・せんねん（先年）・そらう（所労）・たいふ（大風）　已上・一定・下人・正月・上下・大事・大小・入道

三字漢語ーふたうけ（不当気）・御け人（家人）・御けん人（家人）・てんせい人（天性）・かんひやう人（看病）

仏教関係語類

一字漢語ーえん（縁）・きやう（経）

二字漢語ーあくたう（悪道）・くわんおん（観音）・けしん（化身）・けさ（袈裟）・こくらく（極楽）・しけん（示現）・しうしん（執心）・しやうし（生死）・しやうにん（上人）・しゆきやう（修行）・しりき（自力）・せんあく（善悪）・たうそう（堂僧）・つくわう（頭光）・ねんふつ（念仏）・信しん（心）・大きやう（経）

三字漢語ーおとほうし（乙法師）・しゝんけう（自信経）・そとは（卒塔婆）・たうくやう（堂供養）

四字漢語ーすさうりやく（衆生利益）・せいしほさつ（勢至菩薩）・せゝしやう〳〵（世世生生）・ふたん念仏（不断）

五字漢語ーなんちうてんきやうなむ（難中転更難）

漢数詞

和語との複合ー四月の十一日・四月の四日・

一字漢語ー十・廿・八

二字漢語ーさんにん（三人）・せんふ（千部）・一たい（体）・一ふく（幅）・五ちう（重）・七さく（尺）

三字漢語ーせんふ（千部）・三郎た（太）・さん十四（三）・さん十六（三）・三ふきや（部経）・十よねん（余年）

四字漢語ーくわんき三年（寛喜）・けんちやう八ねん（建長八年）・こうちやう三ねん（弘長三年）・十七八ねん（年）

漢語サ変動詞ーあいくす（相具）・あんす（案）・くす（具）・こらんす（御覧）・せんす（撰）・そんす（存）・ひろうす（披露）・信す

言語生活に於ける漢語受容の増加を示すとみられる一般語類が多い。宗教者である親鸞との共同生活の言語環境に由来するであろう仏教関係語類も多い。意義概念の単純な漢語の使用も多い。例えば漢数詞の多用である。使用漢語（異なり語数）の３０％余である。漢語と和語とを自由に結合させ得るのは漢語習熟の顕れであろうが、未だ多くの漢語と和語とを結合させ得てはいないようである。しかも、抽象的で複雑な意味概念の宗教語よりは、一般的な意義を持つ漢語がサ変動詞と結合しているようである。

4、助詞へ

格助詞「へ」が、移動の意を表す用言に対してその方向を示すという本来の用法を拡大して、格助詞「に」の用法を侵して動作の帰着点をも示すようになるのも、中世語の特色である。[5]

恵信尼は、「へ」を18例も用いるようになっている。平安時代からの用法である「…のほうへ」という、移動する動作の進行方向を表す用法のみで、中世語の特色である動作の帰着点を表す用法は見られていない。

それへまいるへきものはけさと申候めのわらは（第一通2行）

思かへしてよませ給はてひたちへはおはしまして候しなり（第五通56行）

ゑちうへこのふみはつかはし候也（第七通1行）

せんあくそれへのとの人ともはもと候しけさと申（第八通52行）

わか身はこくらくへた、いまにまいり候はむすれ（第十通28行）

5、和語の仮名遣い

i、ハ行音表記

ハ行のワ行音への転呼音は時代が降るに従って増加する。十一世紀に一般化したというのがハ行転呼音の現象であるが、恵信尼書状にはハ行転呼現象を起こしているものは二割ほどであるのが実態である。

は→わ　くりさわ（栗沢）・しわふく（咳）・たわこと（戯言）つわき（唾）・おわり（終）

ひ→い　あいくし（相）・あいまいらせん（逢）・はからい（計）・まよいけれ（迷）・おい（甥）

ほ→を　いとをしき（愛）・いとをしさ（愛）・おゝうむひやう（大温病）

ii、語頭のオ・ヲ表記

恵信尼の書写時はオ・ヲの音韻の混用時期であるが、恵信尼は語頭を「お」で統一している。例外は「をや」二例である。しかも一例は「ちゝをや（父親）」という複合語の後項の語頭である。

をや　2　をや（九通15行）・ちゝをや（父親）（一通10行）

語頭を「お」で統一することは、共に生活を送った夫親鸞の表記法とも一致する。親鸞の表記法の影響も考えられる。

iii、語頭のイ・ヰ・エ・ヱ表記

語頭のイ・ヰ・エ・ヱは混用がない。

い　全例

ゐ　ゐ中（田舎）1（九通26行）、ゐの時（亥時）1（十通96行）、ゐて（居）1（十通18行）

iv、語中・語尾のイ・ヰ・エ・ヱ表記

ゐ→い、は「まいる」で固定している。『平安遺文』『鎌倉遺文』のほとんども「まいる」の表記で固定している。この語が「まいる」表記に固定することは既に指摘もある。

え→へ、は恵信尼において多く起こっている。次のヤ行にも「おほへ・みへ」が見えている。恵信尼の表記の混用である。

ゐ　とりゐ（鳥居）1　三30

まいらせ（參）11、まいらす1、まいらせよ1、

まいらせ（補助動詞）15、まいらす1、まいらする4、

まいら（參）2、まいり6、まいる2、まいれ2、

え　へ（得）す候はかり1、へ（得）候はし3、御心へ4、心へぬ事なれ1

ひのえたつのとし（丙辰年）1、ひへのやま（比叡山）1

ゑ　うへしに（飢死）1

恵信尼書状の和語の仮名遣いは、鎌倉初中期のひとつの実態を示すものである。

6、漢字音表記

漢字音の韻尾を中心に仮名で表記しているものを記述する。（抄出）

1　三内撥音

舌内撥音（-n）

（零表記）0

（ん表記）あんして（案）、あんとうし（安藤次）、えん（縁）、くわうす御せん（御前）、くわんおん（観音）、くわんき三ねん（寛喜三年）、くわんき三年（寛喜）、けしん（化身）、けんちやう八ねん（建長八年）、御しけん（示現）、御ふしん（不信）、こらん（御覧）、こらんし（御覧）、さいしん（西

信）、

（む表記）なんちうてんきやうなむ（難中転更難）、

n韻尾は零表記がなく、「む」表記が一例ある以外「ん」表記で統一されている。

唇内撥音（-m）

（零表記）0

（ん表記）御りんす（臨終）、さん十四（三）、さん十六（三）、さんにん（三人）、しうしん（執心）、しん（心）、信しん（心）、ねんふつ（念仏）、

（む表記）うむひやう（温病）、御りむす（臨終）、

m韻尾は「む」ではなく多く「ん」表記であった。ここには漢字音表記の混乱の様子が窺える。親鸞には違例がほとんどなく「む」表記で統一している。

喉内撥音（-ŋ）

（零表記）たいふ（大風）、りんす（臨終）、御りんす（臨終）、御りむす（臨終）、すさうりやく（衆生利益）、

（い表記）御えい（影）

（ふ表記）たふし（当時）

（う表記）こうちやう三年（弘長）、五ちう（重）、さいしやう殿（宰相）、さいさう殿（宰相）、さかいのかう（坂井郷）、あんとうし（安藤次）、すさうりやく（衆生利益）、しやうし（生死）、せ〻しやう〳〵（世世生生）、御わうしやう（往生）、さうてん（相伝）、

ŋ韻尾は「ーう」表記が多いが「零表記」「ーい」「ーふ」表記も見られ一定していない。

2　入声

唇内入声（-p）

（ふ表記）たふし（塔師）、

（う表記）おとほうし（乙法師）、しうしん（執心）、たう（塔）、ほうねん上人（法然）、ゑもんにうたう殿（衛門入道）、

p韻尾は、本来の「ふ」表記が少なく「う」表記が多く恵信尼に漢字音の国語化の様相を見ることが出来る。

舌内入声（-t）

（零表記）にき（日記）、ゑちう（越中）

（ち表記）いまいちと（一）、けかち（飢渇）、しちむ（実夢）、

（つ表記）せいしほさつ（勢至菩薩）、ねんふつ（念仏）、

t韻尾は、まだ零表記も見られる。

喉内入声（-k）

（く表記）こくらく（極楽）、しやうとくたいし（聖徳太子）、しんかく（新楽）、せんあく（善悪）、すさうりやく（衆生利益）、六かくたう（角堂）、

（き表記）しりき（自力）、

k韻尾は「-く」「-き」表記である。

3　拗音

開拗音

（類音字表記）上れんはう（浄蓮房）、

（拗音表記）うむひやう（温病）、おゝうむひやう（大温病）、かんひやう人（看病）、けんちやう八ねん（建長）、こうちやう三年（弘長）、御わうしやう（往生）、さいしやうとの（宰相）、三ふきやう（部経）、七しやく（尺）、しやうし（生死）、

（直音表記）くわうす御せん（光寿）、げす（下衆）、五てうとの（条）、さいさうとの（宰相）、七さく（尺）、さうたい（正体）、せうもん（証文）、もんそ（文書）、御りんす（臨終）・御りむす（臨終）、りんすし（臨終）

院政期には行えなかった拗音の仮名表記が恵信尼に見られるようになっている。但し直音表記も存在する。

合拗音

（拗音表記）くわうす御せん（光寿）、くわんおん（観音）、くわんき三年（寛喜）、くわんき三ねん（寛喜）、つくわう（頭光）、

（直音表記）けしん（化身）、

合拗音の仮名表記が見られるようになっている。但し直音表記も存在する。

恵信尼の漢字音表記はこの期、女性にも漢語の受容が行われ、それを仮名で表記しようとしたところに、資料的価値がある。規範に則った親鸞の漢字音表記は違例が少ないが、恵信尼はまさに鎌倉初中期の漢字音の混用の実態を示すものがあって、当時の漢字音の国語化を知る上で貴重である。

三　口頭語の様相

恵信尼書状の特徴は当時の口頭語[3]が多く見られることにある。

1、助動詞「むず」

「むず」は平安時代の和文では話し言葉として現れ、地の文や和歌には原則使用されない。鎌倉時代語でも同様であったことが、[4]延慶本平家物語等でも指摘されている。俗語でやや品に欠ける表現と意識されていたことは、枕草子の一九五段の清少納言の記述が、平安時代の都人の「むず」に対する意識を物語っている。

ただ、「言はむずる」「里へ出でむずる」など言へば、やがていとわろし。まいて文に書いて言ふべきにもあらず。

院政期以降にも今昔物語集（一九・一四）で、五位という男が無法者として振る舞った時「むず」「むずる」を多用し、信心を得てからは、礼儀に適った「むとす」という表現を用いた記事もある。鎌倉時代には文章中にも用いられるようになったが、恵信尼書状には14例出現する。書状の言語が口語的性格を持っていることを示している。

んすらんとこそ1、むすらんと1、んすらん4、んする1、むするに1、んすれは4、むすれ1、んすれ1

けふまてはしなてことしのけかちにやうへしにもせんすらんとこそおほえ候へ（第四通16行）

これをやさいこにて候はむすらんとのみこそおほえ候へ（第十通19行）

この゛もん入道のたよりはたしかに候はんすらん（第九通36行）

あか月いてさせ給てこせのたすからんするえんにあいまいらせんと（第三通10行）

やまてらにふたん念仏はしめ候はむするになにことやらんせんし申ことの候へきと（第十通78行）

くりさわか候はんすれは申候へし（第九通27行）

わか身はこくらくへたゝいまにまいり候はむすれ（第十通29行）

こくらくへまいりあひまひらせ候はんすれはなにこともくらからすこそ候はんすれ（第十通34行）

書状ごとの使用を示す。

三通ーんする、四通ーんすらんとこそ、八通ーんすらん、九通ーんすらん、んすれは、

十通ーんすらん、むすらんと、むするに、んすれは、むすれ、んすれ

書状の中でも複数回使用しているものは口語的傾向の強い書状と見られる。

因みに口語ではない「むとす」が一例見られる。これは夫親鸞の「一途に経を読もうとするのか」という言葉の箇所である。恵信尼が親鸞の発言を引用した箇所での出現である。

三ふきやう(部経)をせん(千部)ふよみ(読)て、すさうりやく(衆生利益)のため(為)にとて、よみはじめ(読始)てありしを、これはなにこと(何事)そ、しんけう(自信教)人しん(信)、なんちうてんきやう(難中転更難)なむとて、身つから信し人をおしへ(教)て信せしむる事、まことの仏おん(恩)を、むくゐ(報)たてまつるものと信しなから、みやうかう(名号)のほかには、なにことの(何事)、ふそく(不足)にて、かならす、きやうよまん(経読)とするやと思かへし(返)して、よまさ(読)りしことの（第五通37行）、

2、助動詞タシ

願望の助動詞「まほし」が衰退し中世以降「たし」が現れ、通俗語として、口語を交えた資料に散見するようになる。「たし」は公式の文章語にはほとんど見られないものである。恵信尼書状には「たし」が8例見られる。たく7例、たき1例。しかも「まほし」は存在しない。鎌倉時代に口語として出現した「たし」が恵心尼書状に多くあることは書状言語が口語的性格を強く示すものであることを示している。

よろつ(万)つね(常)に申うけたまはり(承)たく候へともたしか(確)なるたより(便)も候はす（第八通6行）

としより(年寄)てはいか(如何)、しくみて候人もゆかしくみ(見)たくおほえ(覚)候けり（第九通45行）

きんたち(公達)の事よにゆかしくうけ(承)給はりたく候なり上のきんたちの御事もよにうけ(承)給りたくおほえ候（第十通25・26行）

なにこと(何事)も申たき事おほく候へともあか(暁)月たより(便)の候よし申候へは、よるかき(夜書)候へは、よにくらく(暗)候て、よもごらんし(御覧)へ(得)候はしとて、と、め(止)候ぬ。（第十通82行）

「たし」の見られる書状は、八・九・十通であり、右掲の「むず」同様の出現である。これらが口語的様相の傾向の書状である。こうして娘の覚信尼への書状も一律の言語使用ではなく。第一・二通の譲状や、第三通の夫親鸞の死の知らせの返事に、夫の若き日の行状を想いを篭めて娘に告げようとする書状には、口語的様相を帯びる言葉の使用は少ない。最晩年に切々と老いを語り、自分の孫等近親者への愛情を吐露し、それを告げる書状には普段着のような日常語としての「むず」や「たし」が見られるのであろう。

四　言語の地域性

方言の東西二方言の記述は、室町末期のJ・ロドリゲスの『日本大文典』や、禅僧による抄物の東国語資料が知られるが、遡って鎌倉時代の東国語の実態については、東国所在の文献の三教指帰注や諸事表白[6]にその様相を見ようとするものがある。又、東国に在住した日蓮の書状等に東国語の事象を報告するものもある。[7]しかし、鎌倉時代の東国語の実態解明は困難であるのが現状である。近時、日本語の歴史としての方言の東西対立を再検討して論じたもの[8]も著された。鎌倉時代の東国語の言語的傾向を、越後在住でその地から発信された恵信尼書状に見ることとする。

1、助詞トン

接続助詞「とも・ども」は雅語・文字言語であり、「とん・どん」は俗語・音声言語として存在した語であるという。[9]特に東国方言との関係で日蓮遺文を鎌倉時代の東国資料として使い、滞在が長かった相模国と関係が深い文献に「とん」「どん」が見られるとしている。鎌倉時代末期の書写とされる最明寺本宝物集は、神奈川県足柄上郡金田村（現大井町）の最明寺襲蔵であり相模国と関係の深い書で、この書にも接続助詞「とん」「どん」が見られるという。

十方世界の水を海にいれて、そのかはの水とはしるとん、菩提心の功徳ハはかりかたし（三丁オ）

ここで、独自に日蓮書状の「とん」を『日蓮聖人真蹟集成』で確認してみる。

兵衛志殿御返事（建治三年（一二七七）十一月二十日付け）二〇八行

しかれとん（27行）、かわるとん（73）、信せしかとん（97行）、ありしかとん（127行）、あてかそふとん（153行）、あひしかとん（155行）、うらみさせ給しかとん（168行）、ゆつられたりとん（196行）、申とん（201行）、ものうけれとん（203行）、

千日尼御前御返事（弘安元年（一二七八）七月二十八日付け）三三四行

存候とん（7行）、ひろまり候しかとん（26行）、渡りはしめて候しかとん（29行）、ましましかとん（50行）、候へとん（62行）、とかれて候へとん（105行）、なけれとん（109行）、嫌とん（136行）、許たるやうなれとん（158行）、あらされとん（186行）、やふれとん（188行）、僻事なりとん（217行）、有とん（273行）、わすれせ（ママ）とん（274行）、申候つれとん（297行）、たすかるへしとん（311行）、ありとん（319行）

千日尼御前御返事（弘安三年（一二八一）七月二日付け）二八八行

十字にて候へとん（14行）、よみまいらせ候とん（39行）、きかす候へとん（39行）、五寸と候へとん（48行）、候へとん（58・69行）・とかれしかとん（81行）、えしかとん（86行）、疑とん（97行）、御舌とんの（116行）、まちくらせとん（150行）、來らすとん（152行）

日蓮においては、常用の接続助詞が「とん」であることが分かる。因みに親鸞においては「とん」の使用は確認されない。

恵信尼書状には接続助詞の「ども」が多く使用されているが、この「とん」が二例ではあるが確認される。これは鎌倉時代の東国語が顔を覗かせたものかと見られる。相模国で使用された方言と見られる「とん」は越後を含めた東国の広い地域で使用されたものなのかを確認する必要があるが、現時点では成し得ていない。

恵信尼の「とん」の出現箇所を揚げる。

しかしながらひかりにてわたらせ給と候しかとんくわんおんの御事は申さず候（三通59行）

よろつたよりなく候へとんいきて候時たて、もみはやと思候て（八通13行）

恵信尼の自筆箇所の仮名表記からこの箇所が「ども」ではなく「とん」であることを複製本で確認することができる。

しかし、この恵信尼の「とん」の認識は従来はされて来なかった。この箇所を翻字本の三本を引例して示すとそこには違いも見られるが接続助詞「とん」の認識は見られないようである。

多屋頼俊校注「恵信尼の消息」（岩波古典文学大系82『親鸞集　日蓮集』一九六四年）

しかしながらひかりにてわたらせ給と候しかどもくわんおんの御事は申さず候しかども

よろづたよりなく候へども、いきて候時、たて、もみばやと思候て

大原性實校注「恵信尼書簡」（定本親鸞聖人全集第三巻、法蔵館、一九七六年）

しかしながらひかりにてわたらせ給と候しか。とんくわんおんの御事は申さず候しかども

よろづたよりなく候へどん、いきて候時たて、もみばやと思候て

石田瑞麿『親鸞全集』別巻（春秋社、一九八七年）

しかしながらひかりにてわたらせ給と候しか。とん（殿）くわんおんの御事は申さず候しかども

よろづたよりなく候へどん（ママ）、いきて候時、たて、もみばやと思候て

右の古典文学大系本は、両箇所とも「ども」と読み、接続助詞「とん」の認識は見られない。

定本親鸞聖人全集本は、「どん」「との（殿）」であり、一箇所は接続助詞を、もう一ヵ所を名詞「との（殿）」と解している。

『親鸞全集』別巻は、「どん（ママ）」「との（殿）」であり、恵信尼の誤字とした「どん（ママ）」であり、一方は名詞「との（殿）」と解釈している。

この箇所は「候しか。とん（殿）」よりは「候しかとん（ども）」と解したほうが妥当であるとみられることを、恵信尼書状の内部事象で検証してみる。恵信尼の文接続表現として、過去の助動詞「き」＋接続助詞「ども」の「しかども」を確認すると多くの例が見える。

申て候しかとも、申さす候しかとも、時日をまち候しかとも、思まいらせて候しかとも、おほせられて候しかとも、うみて候しかとも、

一方、「との（殿）」は、他では「殿」か「との」の表記で「とん（殿）」表記は見られない。

殿2、さいさう殿1、わかさ殿1、ゑもんのにうたう殿1

との　1　御事はかりをはとのに申て候しかは（三53）、

わかさとの2、

との人とも1　せんあくそれへのとの人ともはもと候しけさと申もむすめのうせ候ぬ　八53

更に接続助詞「ども」の出現箇所も以下すべて ども で表記されている。

申さふらふへきなれとも、しらぬものにてさふらへとも、さは候へとも、たのみなく候へとも、思へきにも候はねとも、おほへ候へとも、みはやと思候へとも、たひ〳〵ひんには申候へとも、申うけたまはりたく候へとも、たて、みはやと思候へとも、おほえ候へとも、申たく候へとも、わつらはしく候へとも、まうし候と申候へとも、思はす候つれとも、まちてこそ候へとも、おそろしくなりて候へとも、いぬのやうにてこそ候へとも、き、候へとも、うむへく候へとも、うみて候しかとも、申候へとも、おほく候へとも、

「と＋も」もすべて行ともで表記されている。

けふともしらぬものにて、あくたうにわたらせ給へしと申とも、なに人ともおほえす、いのちいくへしともおほえす候、わたらせ候けりとも、いまはところともはなれ候て、まいらせんとも、

また、「ども（共）」もすべてゝんともで表記されている。

下人とも2、事とも3、ところとも1、との人とも1、ふみとも1、ものとも1、りやうとも1、

「とん」の出現可能箇所を煩わず列記したが、「とん」が東国語であるならば、恵信尼の「とん」は二例のみであるが、これは東国語の接続助詞の「とん」と同一のものであろうか。

因みに親鸞の遺文にはこの「とん」は見られない。

2、形容詞の音便表記

言語の東西が持つ地域的言語特徴については、J・ロドリゲス『日本大文典』[11]（一六〇四―一六〇八）の「卑語」の章で当時の日本方言についての記述が知られる。ロドリゲスは「関東または坂東」の条を設け、その方言的特徴を概ね次のように述べる。（ローマ字省略）

三河から日本の崖に至る東の地方は、一般に物言いが荒く、鋭くて、多くの音節を呑みこんで発音しない。これら

の地方の人々相互のあいだでなければ理解されない、この地方独特で粗野な語が多い。

形容詞では良う、甘う、緩うなどのウ音便形の代わりに書きことばのように非音便形を用いる。白く、長く、短くロドリゲスの記述した室町時代末期の特徴は、現代東日本方言として見られるものが多い。室町末期の言語状況が、院政鎌倉時代にも当てはまるとすれば、惠信尼の書状が示すウ音便表記の有無は、言語の地域性の特徴を示していることになる。

惠信尼の形容詞の音便表記は、すべて非音便表記である。

（ウ音便表記）用例無し

（非音便表記）

いか、しく1、うるはしく1、うれしく4、おそろしく1、おたしく1、おほく3、かたく1、くらく3、けにけにしく3、心くるしく2、心もとなく1、ことあたらしく1、さうたいなく1、しろく1、すくなく1、たのみなく1、たよりなく1、ちかく1、ちからなく1、つくしかたく4、なく2、ふかく1、ものうく1、ゆかしく6、よく5、よくよく2、わつらはしく2、おさなく1

非ウ音便の用例は次の通りである。

いか、しく（如何）1　としよりてはいか、しくみて（如何見）候人もゆかしくみ（見）たくおほえ（覚）候けり（第九通45行）

うるはしく（麗）1　あまりとしより（余年寄）候ててもふる（手震）へてはん（判）なともうるはしく（美）はしへ（得）候はし（第二通38行）

うれしく（嬉）　4　おやこ（親子）のちきり（契）と申なからふかく（深）こそおほえ（覚）候へはうれしく（嬉）候〳〵（第三通67行）

よみちこそ（黄泉路）にてきぬ（小袖）も候はんすれは申はかり候はすうれしく（衣）候なり（第九通32行）

さいこ（最後）の時のと思てもちて（持）候へよにうれしく（嬉）おほえ（覚）候（第十通22行）

おそろしく（恐）　1　いまは時日をまちて（待）こそ候へともとしこそ（歳）おそろしく（怖）なりて候へとも（第十通7行）

おたしく　（穏）　1　ことしは十やらんになり候をは、はよにおたしく□く候し（第九通13行）

おとなしく（大人）　1　いまはおとなしくとしよりておはし候らんとよにゆかしくこそおほえ候へ（第十通46行）

おほく（多）　3　さてもこそよりはよにおそろしき事ともおほく候也（第十通15行）

めのわらはもひゝとせのおゝうむひやうにおほくうせ候ぬ（第十通55行）

なにことも申たき事おほく候へともあか月のたより候よし申候へは（第十通81行）

よろつつくしかたくてかたくて（衍字）と、め候ぬ（第七通32行）

かたく（難）　1　あまりにくらく候てこまかならす候（第十通36行）

くらく（暗）　3　よるかき候へはよにくらく候てよもこらんしへ候はしとてと、め候ぬ（第十通83行）

あまりにくらく候ていかやうにかき候やらんよもこらんしへ候はし（第十通92行）

けにけにしく（実）　3　あまかさやうの事申候らむはけに〳〵しく人も思ましく候へは（第三通51行）

この十七八ねんかそのかみけに〳〵しく三ふきやうをせんふよみて（第五通26行）

三ふきやうけに〳〵しく千ふよまんと候し事は（第五通49行）

心くるしく（苦）　2　いくほといくへきみにても候はぬにせけんを心くるしく思へきにも候はねとも（第三通81行）

つね申うけたまはる事だにも候はぬ事よに心くるしくおほえ候（第八通30行）

心もとなく（心許無）　1　かやうのたよりになにもまいらせぬ事こそ心もとなくおほへ候へとも（第四通18行）

ことあたらしく（殊新）　1　これらはことあたらしくたれかはしめてとかく申さうらふへきなれとも（第二通14行）

さうたいなく（正体無）　1　そのほかはとしのけにて候へはいまはほれてさうたいなくこそ候へ（第九通6行）

しろく（白）　1　御たうのまへにはたてあかししろく候に（第三通29行）

すくなく（少）　1　これらほとのおとこはよに[すく]なく申候也（第九通29行）

たのみなく（頼無）　1　いよ〳〵せけんたのみなく候へともいくほといくへきみにても候はねとも（第三通79行）
たよりなく（頼無）　1　よろつたよりなく候へとんいきて候時たて、もみはやと思候て（第八通13行）
ちかく（近）　1　このひんはこれにちかく候みこのおいとかやと申もの、ひんに申候也（第十通35行）
ちからなく（力無）　1　なにもまいらせぬ事こそ心もとなくおほへ候へともちからなく候也（第四通19行）
つくしかたく（尽難）　4　よろつつくしかたくてかたくて（衍字）と、め候ぬ（第七通32行）
よろつきんたちの事ともみなうけ給りたく候つくしかたくてと、め候ぬ（第九通38行）
なにことも御ふみにつくしかたく候てと、め候ぬ（第八通74行）
うけ給はり候てたになくさみ候へく候よろつつくしかたく候てと、め候ぬ（第十通89行）
なく（無）　2　おほかたのせけんもそんして候あひた中〳〵とかく申やるかたなく候（第三通75行）
あやのきぬたひて候し事申はかりなくおほえ候（第十通17行）
ふかく（深）　1　おやこのちきりと申なからふかくこそおほえ候へはうれしく候〳〵（第三通66行）
ものうく（物憂）　1　ものかく事ものうく候てへちに申候はす（第四通22行）
ゆかしく（床）　6　あはれゆかしくこそ思候へとしよりてはいか、しくみて候人もゆかしくみたくおほえ候けり（第九通43行）（第九通45行）
上れんはうの事もとはせられてゆかしくこそ候へ（第九通50行）
又きんたちのことよにゆかしくうけ給はりたく候也（第十通24行）
いまはおとなしくとしよりておはし候らんとよにゆかしくこそおほえ候へ（第十通47行）
むまれておはしまし候けるとうけ給はり候しはそれもゆかしく思まいらせ候（第十通53行）
よく（良）　5　よくかき候はん人によくか、せてもちまいらせ給へし（第四通6行）

やかてあせたりてよくならせ給て候し也（第五通48行）
（汗）（垂）（成）
ことにふれてよくもなりへす候はかりそわつらはしく候へとも（第九通3行）
（事）（触）（得）（煩）
よによく候しもうむひやうにうせ候ぬ（第九通18行）
（温）（病）（失）
よくよく（良良）2 念仏の信しんよりほかにはなにことか心にかゝるへきと思てよくくあんしてみれは（第五通24行）
（心）（他）（何事）（掛）（案）
人のしうしんしりきのしんはよくくしりよあるへしとおもひなして（第五通42行）
（執心）（自力）（心）（思慮）（思成）
わつらはしく（煩）2とけはらのわつらはしく候しかことにふれてよくもなりへす候はかりそわつらはしく候へと（第九通3行）（第九通4行）
（溶腹）（煩）（事）（触）（得）（煩）
も
おさなく（幼）1 おさなく御みのやつにておはしまし候しとしの四月十四日（第四通8行）
（幼）（身）（八）（年）

惠信尼の書状が示す非ウ音便表記は、当時の地域的傾向として、東国語の言語特徴を示しているものであろう。

因みに親鸞自筆書状の形容詞の音便表記は次のようになっており、惠信尼と異なってウ音便表記が見られるのである。

（ウ音便表記）

あしう　1　第十通
いとをしう　2　第十二通・第十二通
くはしう　2　第五通・第十通
たのもしう　1　第四通
めてたう　2　第十通
わひしう　1　第十二通

（非音便表記）

あさましく〳〵1、うたがひなく 1、ちかく1、なく2、ふかく1、よく〳〵5、

（ウ音便表記例）

あしう　わかみは如来とひとしと候らんはまことにあしう候へく候（十24）

いとをしう　くにの人〳〵いとをしうせさせたまふへく候（十二5）

このものともとも（ママ）御あはれみあはれ候へからんいとをしう人〳〵あはれみおほしめすへし（十二20）

くはしう　なにことも〳〵いそかしさにくはしう申さす候（五17）

このやうはこの人〳〵にくはしう申て候（十29）

たのもしう　専信坊京ちかくなられて候こそたのもしうおほえ候へ（四2）

めてたう　たつねおほせられて候事返々めてたう候（十2）

身口意のみたれこゝろをつくろいめてたうしなして浄土へ往生せむとおもふを（三14）

わひしう　みのかなはすわひしう候ことはたゝこのことおなしことにて候（十二14）

夫妻の書状のウ音便は左記のようである。

恵信尼ー ウ音便0　親鸞ー音便　9例

ーク　全例　ーク　11例

親鸞は越後流罪までの三十五年間を京都で過ごし、以後六十歳過ぎ頃まで越後と関東で布教活動を行い、その後帰洛して執筆活動を行った。親鸞の書状は晩年に京都から関東の門徒達に送られたものである。恵信尼には見られなかったウ音便表記は当時の西部方言の反映であろうか。しかも、次掲の如く、親鸞は書状以外でもウ音便表記は極くわずか見られるがほとんど使用していない。関東の門人に向けてはウ音便を多く使用し、恐らく自己の持つ口頭言語で語りかけ、一方、他の謂わば宗学上の文章には非ウ音便の形容詞を多く用いているのが親鸞である。親鸞は、書状ー日常言語、宗

学書ー晴れの言語という使いわけを意図した著作活動であったろうか。

	（ウ音便表記）	（非音便表記）	
西方指南抄	ヒサシウ1例	他全例	
唯信抄文意	イヤシウ1例	他全例	（正月十一日本・正月二十七日本）
尊號眞像銘文	クワシフ	他全例	（廣本）
一念多念文意	0	全例	
三帖和讃本文	0	全例	
三帖和讃左注	0	全例	
唯信抄	イヤシフ1例	他全例	（専修寺本左注）
	イヤシウ1例	他全例	（西本願寺本左注）

3、動詞の音便表記　ハ行動詞のウ音便

ロドリゲスの記述する東国語の音便は、次のように記述している。（ローマ字省略）

払うて、習うて、食らうて、買うてなどの代わりに、払って、習って、食らって、買ってなどを使う。

恵信尼書状には形容詞のウ音便表記同様、ハ行動詞のウ音便の用例は見られない。

（非ウ音便表記）

うたかひ思まいらせぬ1、したかひて1、つかひ候1、はからい候1、まよいけれ1、

右以外は送り仮名を付さない表記法が多く、ハ行動詞のウ音便表記を確認することはできない。恵信尼書状には形容詞のウ音便同様、西部方言の言語傾向は見られないと判断される。

因みに親鸞の動詞のウ音便表記は次のようになっており、恵信尼と異なってウ音便表記が見られるのである。

親鸞自筆書状[12]　あふて1、
　この十日のよせうまうにあふて候この御はうよく〳〵たすね候て候なり（五9）

唯信抄文意　（正月十一日本ー正月廿七日本）
　シタカフテ1ー1、ナリタマフテ0ー1

尊号真像銘文（廣本ー略本）
　アフテ1ー1、シタカフテ2ー2、タマフテ1ー1、向　0ー1、

一念多念文意
　オモフテ1、シタカフテ1、マウアフテ（参値）1

三帖和讃本文　0

三帖和讃左注
　ウシナフテ1、シタカフテ1

教行信証（坂東本）（一部を揚げる）
　飛、欲、欲、府、向、請、喚、纏、行、學、謂、謂、謂、偶、云、

西方指南抄
　アフテ 2、遇 2、迎 1、値（中略）而 1、厭 1、イフテ（言）2、云テ 2、奪 1、オホフテ（覆）1、覆（朱）1、覆（朱）1、オモフテ 8、欲 1、オモフタマヘ 1、欲（朱）2、欲（朱）1、キオフテ（競）1、競 1、シタカフテ（随）15、随（朱）1、タマフテ（給）2、タマフシカ（給）1、給 1、誓テ 1、問 3、問テ 2、ナラフテ（習）1、忻 2、迷テ 1、マナウテ（学）1、ムカフテ（向）1、向テ 1、對

1、向（ムカウテ）　1、向（ムカフテ）　1

唯信抄

アフテハ1、イフテ1、オモフテ1、シタカフテ1

親鸞の自著と転写本それぞれにウ音便表記がみられる。親鸞は越後流罪までの三十五年間を京都で過ごし、以後六十過ぎ頃から又京都での生活を送っている。恵信尼には見られなかったウ音便表記が見られることは、恵信尼には西日本の言語傾向が見られないことを示していようか。夫妻で異なる言語（方言）を持ち、そして使用していた可能性も考えられる。

4、動詞の音便表記　ハ行動詞の促音便

恵信尼には促音便表記はみられない。

（促音便表記）　用例無し

（促音便無表記）　用例無し

（非促音表記）　したかひて　1

恵信尼には漢字の送り仮名や、仮名書きで促音便表記は確認できない。「っ」という促音便表記法は恵信尼には見られず・促音便を確認はできない。漢字音表記でも零表記であった。

にき（日記）、ゐちう（越中）

因みに親鸞遺文には無表記という方法で、促音便が見られるようである。当時の京都でも促音便が使用されていたことになる。東国的な促音便が使用されたものであるのかは断定できない。用例を抄出してみる。

親鸞自筆書状

非音便表記で促音便表記はみられない。

かしこまりて 1、さきたちて 1、したかひて 1、たまはりて 1、なりて 1、もちて 1、もてあつかいて 1、

教行信証

（促音便表記）（抄出）

専（モンハラ 左訓）

（促音便無表記）（抄出）

遇（アテ）、縁（アテカ）、三月（イカテ）、瞋（イタテ）、致（コソテ）、擧（シタカテ）、従（シタカヒタテマツテ）、捉（トテ）、由（ナホヨテ）、登（ノホテ）

西方指南抄

（促音便無表記）

相語（アヒカタテ）1、アヤマテ（誤）1、在（サイ）アテ（朱）1、アテ（在）6、2、有（ウ）アテ（朱）2、有（アテ）5、イタテ（至）1、至（イタテ）2、入（イテ）1、カヘテ（帰）1、還（カヘテ）1、随（スイ）シタカテ（朱）1、取（トテ）1、成（シヤウ）ナテ（朱）1、跨（マタカテ）1、純（モハラ 左訓）1、精（モハラ 左訓）1、モテ（以）111、以（イ）モテノ（朱）1、以（イ）モテ（朱）1、持（チ）テモ（朱）1、以（モテ）19、以（モテノ）1、用（モテ）1、ヨテ 27、ヨテナリ 1、ヨテカ 2、為（ヰ）ヨテ（朱）1、依（ヨテ）4、依（エ）ヨテ（朱）1、因（ヨテ）1、據（ヨテ）1、分（ワカテ）1、

唯信抄文意（正月十一日本・正月二十七日本）

（促音便無表記）

モテハ（持）1・1、モハラ（副詞）3・3

別に、東国出身の熊谷直実直筆誓願状[13]には促音便「っ」表記が見られた。

せんたう（善導）ゆめ（夢）をみてさとつ（悟）てくわきやう（観経）のそ（疏）はつくり（作）給へり（第一通67行）

又こくらく（極楽）にそくわん（所願）にしたかつて（従）うまる（生）との給へる事を（第一通62行）

いよ〳〵これらのもん（文）をもつてうたがい（疑）なき（無）なりと思（第一通46行）

たゝみたのほんくわん（本願）をもつてすといふは（第二通7行）

以上、恵信尼に促音便表記は確認できなかったが、形容詞、動詞共にウ音便表記の存在しない実態から、書状が示す地域性は西部方言の傾向のものではないと判断されようか。

5、恵信尼の出自について

ここで問題となるのは、恵信尼の出自である。[14] 恵信尼は越後に在住したことは明らかであり、書状もその地から発信された。書状が示す言語も東国的傾向と確認できよう。今日まで恵信尼の出自には京都説、越後説が様々出されている。これらの説を一説ずつ挙げてみる。

京都説　今井雅晴『親鸞と浄土真宗』（吉川弘文館、二〇〇三年七月）

主に恵信尼の書状の分析と、国司に就任する資格の観点から検討した。其の結果、恵信尼の出身は京都の中流貴族であり、結婚は京都であったと判断することになった。つけ加えて、恵信尼は親鸞より早く法然の教えを受けていたことも明らかとなった。このことは、恵信尼の生活と信仰を考える上で重要な参考史料となるものである。

越後説　平野団三『越後と親鸞　恵信尼の足跡』（柿村書店、一九七一年、第三次改訂一九九二年）

為則頃の公家は遙任といって、官職につくが、官職の俸禄だけもらって、其の地へ赴任することがほとんどなかった。三善為則は治承元年越後介に任じられ、翌二年解任されている。その間約一ヵ年である。もし赴任したとしても家族の同伴などありえようはずもない。（中略）恵信尼は越後の九条家笹倉荘の庄司三善為教の子女とするのが自然のようである。それが娘となった頃父に伴われて上洛した。縁あって九条家に半人として仕えることになる。

幾年か都にあって見習いの歳月が流れ去る。ここで恵信尼の深い教養と典雅な性格が培われる。九条家特有の公家一字花押が後恵信尼書簡に使用されるのも、恵信尼と九条家とのかかわりをよく説明するものである。ここ九条家で源空に連れられて出入りした親鸞と恵信尼との出会いが想像される。

中間説　菊村紀彦『恵信尼から見た親鸞』（鈴木出版株式会社、一九八八年七月）

恵信尼が見事な筆致で文章を書き、しかも的確な表現であることを見ても、都の洗練を受けていたことは間違いないのであります。また、京都に住んだ人でなければ書けない固有名詞を無造作に挙げております。たとえば、手紙（三）のなかに「山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて」とあります。この文章の前に「比叡の山に堂僧つとめて」と親鸞聖人の前歴を語っております。しかし、ただ単に「山」といえば、京都の人なら誰でも比叡山とわかるのですが、他国の人はわかりません。静岡県人なら、山といえば富士山のことでしょうから……。山が、固有名詞になるケースも多いのであります。また、手紙（三）のなかで夫のことを「殿（との）」と呼んでおります。子供たちのことを「公達（きんだち）」（手紙九）と記しております。これは、地方の農家の表現ではありません。いかにも都風とはいえないでしょうか。このことは、地方が非文化であるという意味では決してありません。恵信尼が、農家の出であってもいいのですが、そのようには考えられないということの証左に挙げているのであります。（中略）しかし、それも確証がないのです。もしかしたら三善氏の子女であり、たまたま、越後の所領地で生れる場合も考えられますが、とにかく、京都生活をしていた人であることは間違いないでしょう。都で教養を見につけたということです。

右の諸説は、系図等の検討に端を発し、恵信尼の出自を京都と唱える根拠の一つが左のような語の指摘である。

1、公家風な人称語や都人のみに良く通じる語の使用

山ー比叡山の意

「やまをいてゝ、六かくたうに百日こもらせ給て」（第三通5・91行）

殿ー夫のことを呼ぶ

「なによりも殿〻御わうしやう中〳〵はしめて申におよはす候」（第三通3行）

「このもんそ殿〻ひへのやまにたうそうつとめておはしましけるか」（第三通89行）

「さて上人の御事はかりをはとのに申て候しかは」（第三通53行）

子供ー公達（きんだち）ー と呼ぶ

「よろつきんたちの事ともみなうけ給りたく候也」（第九通37行）（第十通24行・第十通25行・第十通50行・第十通87行）

一字花押ー九条家特有かとみられる。

「いまはあまりとしより候ててもふるへてはんなともうるはしくはしへ候はし」（第二通38行）

日記をつけるーかなり上流の文化圏に属していた

四月四日よりやませ給て候し時の事かきしるしてふみの中にいれて候にその時のにきには四月の十一日のあかつき（第六通5行）

その他にも「御け人・御けん人（御家人）」（第九通12行、第十通56行）、「たてあかし（立明）」（第三通28・29行）や訓読語「みそなはす（第十通30行）」等、都での恵信尼の文化生活を過ごしたことを窺わせる言語も披見する。

又、今井雅晴氏による次の助動詞「キ」「ケリ」の使い分けから京都説を説くものにも説得性もある。[15]

恵信尼の書状の文章で「き」が遣ってあれば、彼女自信の体験であり、「けり」ならば他人、例えば親鸞から聞いた話である可能性が大きいということである。

現時点で、恵信尼の出自には発言するものを持ってはいないが、本稿では恵信尼が娘に発した書状の示すいくつかの言語事象が京都的であるよりは、東国的であろうということが確認できたということである。恵信尼は越後出身で東国の地のことばを終生使い続けたものなのか、あるいは京都から越後に赴き、その地のことばに馴染んでそれを使うよう

になったのであろうか。夫親鸞には京都的と言われる言語が見られることと対照的である。

おわりに

女性文書の伝存は数が少ないが、その中で越後という東国に居住した恵信尼による自筆の文書の存在は日本語史的にも貴重である。恵信尼は鎌倉時代の初期の激動の世を行動的に生きている。その女性の文書が語る言語は当時の言語の実態を示している。当時の口語と、東国語とが見せる言語生活の実態は、日本語史の貴重な資料として位置付けることが出来る。古代語から近代語へと移行期の言語のリアルな実態を恵信尼文書に見ることができるわけである。中世人の特に女性の言語生活は豊かなものであったことが実感でき、共に言語生活を送った夫親鸞との、言語に対し研鑽に努めた様子も窺うことができるのである。

註

1　『恵信尼文書』（法蔵館　一九七八年）
一九二一年（大正十）に鷲尾教導氏によって発見され、翌年に公表された。鷲尾教導『恵信尼文書の研究』（中外出版社、一九二三年）で成果が公刊された。
建長八年（一二五六）七月九日付～文永四年（一二六七）九月七日付

2　築島裕『平安時代漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会、一九六三年）

3　小林芳規「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」（鎌倉時代語研究　第十二輯、武蔵野書院、一九八八年）
小林芳規「鎌倉時代語研究の方法」（鎌倉時代語研究　第十五輯、武蔵野書院、一九九二年）

4　小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』（広島大学文学部紀要　特輯号3、一九七一年）
吉田金彦「今昔物語における推量語「むず」「むとす」の用法」（訓点語と訓点資料　第十九輯、一九六一年）

5　青木冷子「「へ」と「に」の消長」（国語学　第二四輯、一九五六年）

6　小林芳規『東国所在の院政鎌倉時代二文献の用語』（『方言研究の問題点』一九七〇年）
小林芳規『中世片仮名文の国語史的研究』（広島大学文学部紀要特輯号3、一九七一年）
7　春日正三「日蓮聖人ご遺文の国語学的研究ー音声言語資料としてのトン・ドン」（立正大学文学部論叢63、一九七九年）
岡崎正繼「接続助詞『とん』『どん』についてー鎌倉時代東国資料に於けるー」（田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢、桜楓社、一九七九年）
8　古瀬順一「『とん』『どん』の読み方」（『中世国語史資料としての「日蓮遺文」の研究』国書刊行会、一九九一年）
杉本つとむ『東京語の歴史』（中央公論社、一九八七年）
9　柳田征司『日本語の歴史1方言の東西対立』（武蔵野書院、二〇一〇年）
10　注7岡崎正繼論考。
11　『日蓮聖人真蹟集成』（法蔵館）の写真版による。
12　土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』（三省堂、一九五五年）による。
親鸞遺文はすべて以下による。
『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館）
13　「熊谷直実誓願状」（『日本名跡叢刊』57、二玄社、一九八二年）による。
14　京都説（抄出）
1、中沢見明『史上の親鸞』（文献書院、一九二二年）
2、赤松俊秀『鎌倉仏教の研究（平楽寺書店、一九五七年』、『続鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店、一九六六年）、『親鸞』（吉川弘文館、一九六一年）
3、平松令三『親鸞』（吉川弘文館、一九九八年）、『聖典セミナー「親鸞聖人絵伝」』（本願寺出版社、一九九七年）
4、井上慶隆「恵信尼の父三善氏について」（『日本歴史』四八四、一九八八年）
5、松野純孝『増補親鸞』（真宗大谷派宗務所出版部、二〇一〇年）
越後説（抄出）
1、宮崎円遵「吉水時代の親鸞」（『竜谷大学論集』三四三、一九五二年、『初期真宗の研究』永田永昌堂、一九七一年に所収）

2、家永三郎「親鸞の生涯」（『中世仏教思想史研究』増補版、法蔵館、一九六三年）一八八頁。
3、笠原一男『親鸞と東国農民』（山川出版社、一九五七年）一五一頁。
4、石田瑞麿『苦悩の親鸞』（有斐閣、一九八一年）九三頁。
5、藤島達郎『恵信尼公』（法蔵館、一九八四年）四〇ー四一頁。
6、真宗大谷派教科書編纂委員会『教団のあゆみ－真宗大谷派教団史』（真宗大谷派宗務所出版部、一九八六年）二七頁。
結婚の時期は吉水（京都）時代説と越後時代説とあると並記し、恵信尼の出自については越後の豪族三善為則（為教）の子女であるとする。
7、菊村紀彦・仁科龍『親鸞の妻・恵信尼』（雄山閣出版、一九九〇年三月）九三頁。
15　今井雅晴『親鸞と浄土真宗』（吉川弘文館、二〇〇三年）四五頁から。『親鸞と恵信尼』（自照社出版、二〇〇四年）四三頁から。

補記

入稿後以下の論考の存在を知り、本稿と深く関わるので追記して、別稿に恵信尼文書の言語の地域性の検討を期すものである。

1、現在の新潟方言でも、恵信尼の住んだとされる新潟県の上越地域では非ゥ音便であり、　他の中越・下越地域ではゥ音便であることが次のように報告されている。

上越の非ゥ音便・促音便の方が古くからあったもので、京阪からのゥ音便が新しく新潟県沿岸部に広がる際、上越は古来の非ゥ音便・促音便に就きゥ音便化を拒んだ。

大橋勝男『新潟県言語地図』（高志書院、一九九八年）、「『新潟県言語地図』に見る米山～守門方言境界」（新潟県ことばの会『ことばとくらし』第22号、二〇一〇年）

2、接続助詞「とん・どん」については、京畿にもかつて存した語であったことが報告されていた。

林和比古「助詞ドンについて」（『国語と国文学』第十四巻第九号、一九三七年九月）

この「とん・どん」の地域性を次のように位置づけている。

鎌倉期の京畿に於ては接續続助詞ドンがドモと並存してゐたのではないだらうか。そしてドンの方が寧ろ俗語的であり、ドモが幾分改つた、固い文語的な語感を伴つてゐたのではないだらうか。而も微妙な語感の差はあったにしても、意味に差はなく、使

用は一方に固定してゐなかったと思はれる。

林和比古氏の引用文献は以下の通りである。

1、教訓抄（完成會版續群書類從第十九輯）底本は東大国語研究室蔵正親町家旧蔵本。

2、愚管抄（新訂増補国史大系）慈鎮和尚著。承久二年（一二二〇）成立。底本は宮内省図書寮本。文明八年奥書。

3、梁塵秘抄（岩波文庫版）竹柏園旧蔵本、江戸時代書写

4、中外抄（尊経閣叢刊の複製本、筆者不明。建暦年間（一二一一～一二一三）又はその直後の筆者か。）